

説明文の指導 (低学年の実践から)

冠 者 ひろみ

一、テーマ

内容を的確に理解させる説明文の指導について

—— ありの行列を通して ——

二、テーマ設定の理由

。子どもの実態から

子どもたちは本を読むことが大好きである。週二回の図書
の貸し出しには、待ちかねたように図書館へとんで行く。
五月末に開館したのだが七月中旬までの約一か月半で最高
九冊読んだ。

本のジャンルは物語が一番多い。展開がおもしろいので
好んで読んでいる。それに比べて説明文はなじみが薄い。

三年生の説明文の教材は「みつばちのダンス」「ありの
行列」があり、この二つの素材「みつばち」「あり」は、
子どもたちの生活の中でも比較的身近に見ることのできる
昆虫であり、時期的にちょうどありがたくさんいるので学
校へ持ってきてみんなと見せ合っている子もいて、この単

元に関してはたいへん興味を持って取り組めた。

読解の面では、要点をおさえながら読む子は少ない。す
ぐにさし絵に頼ってしまう。ほとんどの児童は、ひろい読
みしかできず、単語や文節で区切って、つながりがつかめ
ない。去年二年生担任だった先生にきいてみると、やはり、
どうしても要点がつかみにくいということだった。

そこで、ことば、文、文章で立ちどまって、文章に忠実
に読み取っていく子をつくっていききたい。

。国語科のねらいから

学習指導要領の理解領域を見ると「イ 文章や話の要点
を理解し、自分の立場からまとめてみること。」「オ 自分
の立場から大事だと思うことを落とさないで理解するこ
と。」「キ 語句の意味を文脈に沿って考えること。」とあ
る。本教材に照らしあわせてみると、イとオは段落の要点
をおさえること。文の初めの言葉（はじめに、次に、この
かんさつから、そこで、この研究から……、このように）
などの指示語や接続語をおさえること。キは文脈中の指示

語（その、これは、このなど）のはたらきに注意し、内容の關係に着目することである。

三、研究内容

研究過程の要点をまとめる手だてはどうあったらよいか。

。誰がどんな疑問をもったか。

。その疑問や考えを解決するために、どのようにして観察したり研究したりしたか。

。観察や研究によってどんなことが分かったか。

この三つのことを毎時間、全単元にわたって児童に意識させることに努めた。

四、指導計画（九時間扱い）

(1) ありの行列がなぜできるのかを考えて全文を読み、そのわけを自分なりにまとめる。へ一時間

(2) 「みつばちのダンス」と比べて読み、学習計画を立てる。へ一時間

(3) ありの行列ができるわけが分かるまでの研究過程の要点をまとめる。へ二時間

(4) カードや絵をもとに、研究過程を正確に読み取る。へ二時間

(5) 研究過程の要点をおさえて、文章の展開を理解する。へ二時間

(6) ありの行列ができるわけをまとめる。へ一時間

この教材は九つの形式段落からできている。それを大きく分けると三つの意味段落に分けられる。意味段落を①②③、形式段落を④⑤⑥⑦……で示すと①は①で疑問であり、②は②③④⑤⑥⑦で観察や考えであり、③は⑧⑨でわかったことのまとめになるへ図・略。全体を図式化すると、

疑問（ありの行列はなぜできるか）

ウイルソンの観察

。はじめに

。次に

ウイルソンの考え（道しるべ）

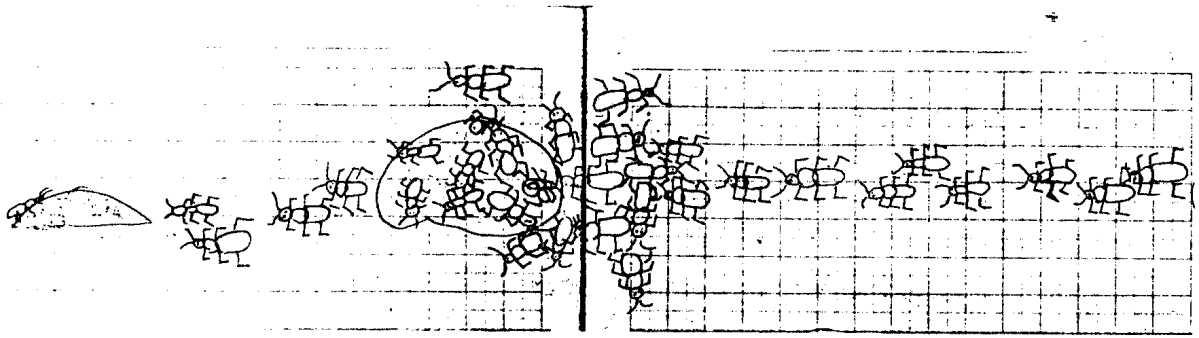
研究と分かったこと（体の仕組みを研究。おしりのと

ころからにおいのある、じょう発しやすいえき。）

ありの行列の出来るわけ

結論（えきのおいをたどって行ったり帰ったりする。）

段落の初めの言葉に着目させることは、文章構造を見抜く一つのカギでもある。③「はじめに」④「次に」⑤「このかんさつから」で新たな仮説を立て、その仮説を実証するために、⑥「そこで」で実験研究をし、証明することに



つながっていくのである。⑦「この研究から」で次の⑧、⑨へつなぎ、ありの行列ができるわけを整理し、結論づけているのである。

このように、初めの言葉は前後の内容の関係がどのようになっているかを知る手がかりとなるので大事に扱った。

文末表現は、書き手の判断の仕方を表すものである。

「ました。」の文は観察したり研究したりしたことを書いた文で、「です。」「ます。」の文は、観察や研究を通じて分かったことを説明している文のようである。文末表現の違いを比べることによって書き手が対象をどのようにとらえているのか、書き手の態度に気づかせることも大切にしたい。

また、この教材には指示語が多く使われている。指示語が何をさしているのかはつきりさせ、簡潔な表現をとるはたらきをしていることに気づかせる。

五、実践例

要点をまとめる へ第六時

T ありの行列はどうしてできるんだらう。

C それは、えさを見つけた一ぴきのありが、すに帰ってなかまに教えるからです。

T どうしてそれが分かったのですか。

C 教科書の五十七ページ一行目に「一ぴきのありが……」から八行の「……外れていないのです。」を読むとわ

次	大	い	ち	し	道	見	あ	出	行	は	人	こ	か	何	の	と
に	き	て	り	の	の	つ	り	来	た	か	か	の	ら	か	で	考
み	な	ま	に	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま
お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お

かります。

T その中のどの部分を読むとわかるのかな。

C 「一つまみのさとうをおきました。」「一ぴきのありが：

…見つけました。」「たくさんの…：行きました。」「は

じめの…：外れていないのです。」

T そうですね。なるほど…：（教師が大事だと思うこと

ばや文をあらかじめ準備し、児童からそれが出てきた

らカードで提示する。白い画用紙のカードにする。）

T 次に 大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎった

ね。ありは、どうしたんだらう。

C ありはちりぢりになってしまいました。

C 道のつづきを見つけました。

C ありの行列ができていきました。

C 行列の道すじはかわりません。

T 大きな石をおかれてちりぢりになったのに、どのよう

にしてもとの道のつづきを見つけたんだらう。

C ?…：

C この絵をみてみよう。

C あっ、わかった。（絵をさしながら）こうやってまよっ

ているうちにやっとこの一ぴきが見つけたんだ。

へ前ページ上図参照

T そうだね。それは、教科書のどこにかいてあるかな。

C 五十七ページ十一行め。ようやく…：見つけました。

でわかります。

次において、大きな石
 をおいて、さえぎの
 行くと手をさすると、
 石の所で、ちりぢ
 りになつたか、よ
 うやく、石の向こう
 かりか、石のつづき
 かわの道のつづき
 を見つけた。あ
 だんだんに、あ
 の行列が出来てい
 きの道すじは、か
 列の道すじは、か
 わりません。

T そうだね（児童が出してきたじじなことは、文をカードに準備しておいて、そのつど提示する。）

このように、疑問をなげかけながら、本文に即して大事なことばや文を児童に見つけさせていった。わからなくてゆきづまったらさし絵にもどって考えさせる。そこで子どもがつかんできたら、必ずそれは教科書のどこに書いてあったかさがさせた。そして発表させた。教師が意図する箇所を、前もってカードに準備しそのことばや文を提示して理解させた。

板書の方法も工夫してみた。

① ありの行列は、なぜ出来るのでしょうか。（このカードを赤にする。）

はじめに 次に このかんさつから のような順序を示すことばや指示語はピンクのカードにし、大事なことば・文（子どもに見つけさせることば・文）は白のカードにして提示する。

白いカードは毎時間順番をごちゃごちゃにして、正しい順番に並べかえさせる。これも内容を正しく理解するため大切な訓練であった。それらの白いカードが骨子になって要約文へとつながっていくのである。

六、成果と問題点

。教科書の文に忠実にだじじなことばや文が見つけられるようになった。それによって要点をおさえる力がずい分

ついてきた。

。教科書の文にゆきづまった時、さし絵に立ちもどらせるのと、わりあい理解しやすくなった。

。子どもたちが教科書の文に忠実にみつめてきたことばや文を、教師がカードを準備していて、出る都度提示することによって、書き手の意図するところもはっきりしてき、要約文がかきやすかった。

。文末表現の「ました。」・「です。」・「ます。」の違いをしっかりとつけられなかった。

（美濃市立美濃小学校教諭）

付記

。筆者は昭和五十六年度卒業、旧姓平尾ひろみさん、現在美濃市立美濃小学校教諭。

。本稿は昭年五十八年度小学校国語教育研究会での実践記録の発表の要旨を提供していただいたものです。

（小瀬・記）